

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十四年四月二十八日逕檢者特別授承認雜誌第三五二號
昭和二十六年四月廿五日印刷 昭和二十六年五月一日發行

第十七卷 第五號

浄土

五月號

晚 春 佛 心 吉田絃二郎
酒 ほ と け 中村素堂

新 佛 教 道 德 佐藤賢順
颯 田 本 眞 尼 藤吉慈海

愛する

信仰と云うことは、嫌いなものが無くなることです。

たべるのに嫌いな物がある。仕事に嫌いな仕事がある。嫌いな人、嫌いな着物、嫌いな石鹸、嫌いな指輪、嫌いな茶碗、嫌いなインキ。猫が嫌い、山羊が嫌い、煙突の煙が嫌い。隣りの家のフツンの汚い事から、毎朝通る漬物屋の賣聲までが嫌い。裏の病人の喘ぎ拂い、表の女將の電話の掛聲、果てはカレンダーが一枚破つてなくても、毛筋が一本飯桌の下に落ちていても怒る人がある。

氣に入らぬ事や、腹の立つ事が多いのは、本當は自分がソレを消化し切れぬから、ソレで怒れて來るのです。強い胃腸の人であつたら何でもたべて溜らぬ。寧ろ榮養にして吸収して太る。信仰の風呂敷が小さいから包めぬ。弱いから破れる、だから自分にムシャ／＼して怒れるのです。相手が悪いのではなく、自分が足らぬのです。

此の嫌いなモノが、自分の周圍に幾つありますか、十五ある人も五十ある人も百、二百ある人も有るでせう。その嫌いなものが、百あるのが七十に減り、七十有る人が五十に減つて行つたら、それが信仰の進歩です。そして一つも嫌いな物が無くなり、たとへ自分の理想に合はぬ事が有つても、理想に合はぬ事であれば有る程、熱意を以て、自分の理想に化して行く、にくみながらも嫌はずに、愛して行けるのが信です。

だから、信仰ある人は、自分に氣に入らぬ事や、厭やな人、厭やな事があつても、決して惱まぬ。寧ろソレに依つて、自分が好きになろう。相手を自分に近づけて、自分の理想通りのものになしようと元氣附く程であります。だから苦惱に直面する程ニコ／＼して、落付いて、ガツチリ取組んで行ける。これが信仰によつて、常にあたりを明るくし、正しく行ける喜びです。(中野尅子)

目次

新佛教道德	佐藤賢順(4)
不安	中野尅子(11)
元祖廟に詣る	須藤隆仙(18)
なむあみだぶつ	根本そよ子(12)
晩春佛心	吉田絃二郎(1)
酒ほとけ	中村素堂(8)
土筆	藤田寛雅(14)
トータムボール	竹中信常(15)
魅力	松濤誠康(16)
ことば	前田龍海(17)
颯田本眞尼	藤吉慈海(21)
芝園だより	



晩春佛心

吉田 絃二郎

誰れも彼れも櫻あるを知つて、他に花のあるを知らないやうな昨日今日、たまたま畑の片隅や農家の小藪に一株三株の桃の花を見出すのはあはれである。櫻の氣品高く、爽明たる姿は他に比ぶべくもないが、桃の田舎娘の純情可憐さを忍ばせる姿にも捨てがたいものがある。

馬琴の兄の死を悼んだ「笠の露」といふ記によれば兄東岡舎羅父が桃を愛し、生前家の前に一株の桃を植ゑたことが書いてある。

「みづからつちかひ水そゝぎ、こよなふめでたがられしが、焼土の迹にやよりけん、此木見あぐるばかりのびながら、まだ花をさへ見せされば、ことしも此事いひ出て又のはるをまたれしもそのぬしはかく埋木の花さかぬみとなり云々」すなはち兄は一度もその桃の花を見ずして世を去つたので、馬琴はせめてもこの花咲かぬ桃を亡き兄の形見にとも思ひ、小石川茗荷谷の深光寺の塋域に移

し植ゑた。するとその土が適したのか桃は花を持つた。花を持てば持つて、遺族の心残りである。

「ことし己未のはる、此もゝはじめて花さき實を結べりせめてこぞのはるかくあらば、うゑけんぬしのよろこびいかばかりにやあらめとむねふたがりて

死花のかひなく咲くや桃の主

すなはち馬琴の悲歎も想ひやられる。

桃といへば故郷のわたくしの家にも桃があつた。三月の雛の節句には、わたくしたちは桃の花を盃に浮かべて飲んだ。

今度の戦争で、裏の畑に麥や甘藷を作るため畑の桃を二本伐つてしまった。このごろになつて、可哀さうなことをしたと思ふ。かすかな佛心がうごく。

裏の畑と道路の堺に大きな櫻があつた。農地整理の時整理係りの男たちは伐り倒すやうにといつたが、わたく

しは乞ふて畑の中に移植した。櫻はことしも美しい花を見せてくれた。わたくしは夕暮れの畑に佇んでその櫻を見ながら思ふことがある。「わたしが死んだ後に、この家に住んだ人がこの櫻を切ることでもありはしないか知ら？」

煩惱執着は何處にもある。

五月になれば裏の畑には十株ばかりの牡丹が咲く。太白、眞紅、褐、薄紅、それぞれに妍を競ふ。牡丹のおほどかな姿こそ王者の氣品といふべきであらう。この牡丹の中には大震災前、本所四つ目の牡丹園でもとめて來てわたくしが居を移すごとに、共に移し植ゑられたものもあり、わたくしにとつては忘れがたいゆかりの花である。自然、死後の愛着が残る。花は無心であるが、わたくしとしてはさまざまのことを思ふ。

離房の佛間に面した狭い庭はかつて幾度か増上寺の法主大島徹水先生をお招きして「京都に行つたやうだ」とよろこんでいただいた。そこには貴船と鞍馬と加茂の石が一つづゝ三つおのがじし靜かな世界を守つてゐる。

戦後しばらく同居の人を離房に入れたが、その石を臺にして箱作りの釘を打ち、或ひは雪の後の足駄を干し、苔のついた庭石の蒼古幽玄の趣も、凝灰石の沓脱ぎ同然かへり見らるゝこととてなかつた。

わたくしは今ふたゝびそれらの靜かな石をながめては考へる。「わたしの死後、はたして石はどのやうに處置されるであらうか？」こゝにも煩惱執着はある。

駿河國原ノ宿の白隱禪師すら、寺に入れる石が舟で運ばれることになつた時は、まだ眞つ暗な間に起きて庭石を待ちかねたといふ話も思ひ出す。

西行法師が釋尊の涅槃のところに死なんことを願ひ二月の十六日に入寂したことはすでに述べたが、徒然艸の著者兼好法師は觀應元年の二月十五日、恰度涅槃の日に伊賀國で遷化してゐる。兼好の病を聞召した上皇はわざわざ都から典藥院和氣清元を伊賀の國見山の麓田中庄に遣はし兼好の病を見させられたが、兼好は「無常の急なるは桑門の喜ぶ所也」といひ、頭をふり、藥を辭退して、大往生を遂げた。いかにも徒然艸の作者にふさはしい臨終である。

わたくしは晩春の武藏野を歩いてゐた。麥畑は翡翠のやうに青く、雪雀は高鳴き、雜木林の小徑を埋めて落花が雪のやうにつもつてゐた。

わたくしはそこに佇んでしまつた。わたくしはしみじみと生きてゐることをありがたと思ふこゝろでいつぱいになつた。

けふも獨りで、やゝ不自由な脚で武藏野を歩く。新緑に煙る丘の雜木林、麥の畑つぐみの聲、白い花片、五月の微風……すべてがわたくしのものである。「この美しい現世を捨てゝゆくことはさびしい」とわたくしの心はさゝやく。

「死にたくない」とこゝろの隅でさゝやくものがある。わたくしは武藏野を歩いてゐた。ふと、たれかれと親しい友人たちのことを思ひ出した。

そこにも煩惱執着はあつた。わたくしは親しい友人た

ちから別れて、ひとり死ぬことのさびしさに耐へないと思つた。

花の散るころになればかれ等はわたくしを思ひ出すであらう。筒鳥の鳴くころ、桑の實の熟するころ、秋風のころ、時雨のころわたくしを憶ひ出すであらう。こゝにも煩惱執着がある。わたくしは生きてゐた。そしてもし死の時が來たら、人知れず、涙をかくして、一切をあなたまかせに死んで行かう。

犬をいためる長歌

我庵に、たえずゆきかふ、母と子の、犬ぞありける。あしたには、庭に乳のみて、夕べには、門に眠りて、此日ごろ、なれにしものを、前の世の、むくいしものか、うつし世の、わざはひなるか、ゆくりなく、昨日のあさけ、犬とりに、打ころされて、母と子の、しかばねまでも、なしときく。あないたましと、そとばたて、施食供して、思へらく。身を毛衣に、つゝまれて、形を横に、生れきて、吠ゆる外には聲もなく、あさる外には、わざもなく、狗子佛性は、名のみにて、顯現いづれの、日とかせむ。し

ずのをだまき、靜にも、思ひしとけば、後の世に、けふ殺されし、其犬は、人と生れて後の世に、けふころしたる、其人は、犬とうまれて、後の世は、またころすらむ、またころされむ。

反歌

我も亦をしところ思へ

をしと思ふいのちはおなじ命ならずや

行誠上人

後落葉集より

社會生活のための

新佛教道德

—戒律への反省—

佐藤賢順

戦後の新課題

釋尊は涅槃に入られる前に、弟子達に最後の教えを残されましたが、その時のお言葉に、「汝等比丘、我が滅後において當に波羅提木叉を尊重し珍重すること、闇に明に遇い、貧人の寶を得たるが如くすべし。當に知るべし、これは則ち是れ汝等が大師なり。もしわれ世に往すとも、此れに異なることなけん。」と言われました。波羅提木叉とはいろいろの欲望から離れて、解説を得るための戒本で、一つ一つの行いを正しい方向に向けて、段々に解脱してゆくので別解脱といわれています。

釋尊はわが亡き後は戒行を以つて我れと同じものとして尊重して、これに順つてゆけ、と言われたのでありますか

ら、釋尊が日常の道德、生活をいかに重くみられたかは、こと新しく言うまでもないのであります。

終戦後わが國の社會狀態が一變して、民主主義國家が誕生するとともに、古い習慣・道德はすべて封建的社會の遺物として埋り去られたことは、御承知の通りです。しかし戦後すでに滿五年以上になりますが、未だ新しい民主主義社會に適應する實踐道德は生れてこないのです。長い間、いわゆるアブレ・ゲールという名の下に、道德の空白時代が続いているのです。近頃になつてこの傾向を憂えて、特に空白時代に育てられる青少年の將來を心配して、道德教育の必要を叫ぶ聲が次第に高くなつてきましたが、これは當然のことであります。小學校・中學校では前の修身科に代つて、今では民主主義社會の市民教育を擔當するものと

して、社會科が課せられていますが、この社會科の内容を調べると、社會の諸方面の知識を伝えることに急であつて、社會人としての人間を作ることに、殆んど觸れていないかのようであります。

それはさて置き、新しい實踐道德を打ち立てることの必要は、學校教育の方面ばかりではなく、廣く家庭生活、社會生活全體に涉つて痛感されているところでもあります。このような時に當つて、佛教は如何にして新しいモラルを打立て、社會生活に貢獻すべきであらうか。これは大切な課題であります。

眞實への道標

佛教は單なる學問や思想ではなく、眞實の人生を目指してその實踐そのものであることは、改めていうまでもないことですが、その實踐の基本は、法句經はじめ古い經典に示されています。それは「諸の惡は作すこと莫れ、諸の善は奉行せよ、自らその意を淨くす、これ諸佛の教えなり。」^{（一）} といふのであります。惡いことは爲てはならない、善いことは努めて行え、そして自らの意を淨くせよ、これが佛教である。といふのでありますが、これでは余り漠然としていますので、何が悪いことで何が善いことであるかを、もつと細く委く定める要があります。

釋尊當時の僧團には初めは僧團の規律というものはあり

ませんでした。比丘達が解脱のための妨げとなるような悪い行いをするたびに、誡めが作られて、次第に規律が出来てゆきました。それが戒律でありまして、邪淫（みだらな行い）・偷盜（ぬすみ）・殺生（人殺し）・妄語（修行が大して進んでいないのに、高い境地に達しているような嘘をつくこと）——この四つが最も重い罪とされました。これを四つの波羅夷といふます。波羅夷とは重い罪のことです。このうちのどれかを犯した者は、共に修行することのできない者として、僧團から永久に追放されることになるのです。

それからの次第に年が経つに従つて、戒律の數は増えて、ほんのちよつとした過ちでも取り上げられて、禁止されました。例えば、托鉢の鉢がまだ使えるのに、わざと壊して新しいのをもらつてはならないとか。一度他の比丘に與えた衣を、その人が何か氣にいらぬことをしたからといつて、取り返してはならないとか、いろいろな、細々とした事まで定められた結果、比丘の二百五十戒、比丘尼の五百戒というような、澤山の煩わしい戒律ができてしまつたのです。

在家の信者である優婆塞、優婆夷にも、佛陀の教えに従い佛教の信者である限りは、佛法僧の三寶に歸依し、戒律を守らなければならないといふので、五戒が定められました。これは信者の守るべき最少限度の戒律であつて、不殺

生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒の五つの戒めであります。

すべて物事は余り煩わしくなると肝腎の根本が見失われがちであります。戒律もその通りで、余り煩わしくなつて末節に拘泥こだわるようになりますと、根本の精神が忘れられてしまいます。そこでの中に大乘佛教が發達してから、佛陀の眞精神を生かすために、大乘の戒律ができました。梵網經ぼんむの十重四十八經戒とか、瑜伽論ゆがろんの三聚淨戒じゆじやうかいとか、日本天台の圓頓戒えんどんかいとか、それぞれありますが、今はそれらの詳しいことには觸れません。たゞ私どもは戒律の根本の精神を生かすように心掛けたいと思います。

新道德の基礎

戒律はもともと、教團の比丘達あやまぢが過あやまちや罪を犯したときに一々これを誡めて、再び犯すことのないようにというので定められたもので、自然、「何々してはならない」という形で示されて、消極的でありますから、それでは強く現實の社會生活に働きかけて、社會を導く實踐的な原理となることはできません。そこで「何々せよ」、「これこれであれ」という積極的な呼びかけが望まれるのであります。現實の社會状態は何によらず、このような力強い呼びかけを待つております。この「何々してはならない」という否定的・消極的な性格は、原始佛教の時代から現代に至るまで、印

度文化を貫く特色であると思われれます。

一昨々年、暴漢の刃に倒れた印度のガンヂー翁は、ジャイナ教徒で直接佛教とは關係ありませんが、無抵抗主義で一生を通した雄々しさや、戒律堅固の日常生活には、思わす襟を正さずにはいられないものがあります。翁の根本の主張であるアヒンサアヒンサ（これは不殺生のこと、非暴力などいわれていますが）をはじめ、禁欲とか、清貧とか、無所得とかの思想は、もしその消極的な方面だけを考えるとすれば、現代の民主主義文化とは著しい隔りがあるようであります。といふますのは、現代の生活感情を中心として考えますと、欲望はすべてこれをそのまゝ十分に満足させ、豊かな物資の上に楽しい生活を築こうと誰しも望んでいるので、これと印度の禁欲的な道德とは、なかなか調和しがたいように思われるからであります。

そこで佛教が新しい社會の實踐道德として役立つためには、禁欲的な消極的な方面だけでなく、これを裏づけとした積極的な方面を取り出さなければならぬので、またここにこそ、佛教の本來の面目があるのであります。

佛教の積極的な實踐道德は、釋尊の直接の教えである八正道（悟りのための八つの正しい道）とか、大乘菩薩道の實踐である六波羅蜜（解脫のための六つの修行の方法）とかに現れています。今は煩わしいので八正道や六波羅蜜の一つ一つをお話することは略しますけれども、これと

先ほどお話ししました五戒とを照し合せて、こゝに新しく佛教の實踐道德の目印しを立てたいと思います。これには「何々してはならない」といふような禁止的な條項はすべて入れてありません。といふますのは、五戒にあるように、人を殺してはならないとか、盗みをしてはならないとか、詐欺をしてはならないとかいふことは、當然のことで、今では道德が取り上げる問題というよりは寧ろ法律の範圍に委ねられた事でありまして、國の法律がこれを禁止しているからであります。そこで實踐道德の基礎となるもので、しかも佛教の特色を最もよく發揮した徳目は何であるか、と求めると、次の五つの徳目が得られるのであります。

すなわち第一に無私(私のないこと)、第二に慈愛(人をいつくしみ愛すること)、第三に純潔(夫婦の愛の生活を純一にすること)、第四に勤勞(生産に勤め勵むこと)、第五に和合(社會が内から仲よく結ばれること)——この五つであります。

ところで、この無私・慈愛・純潔・勤勞・和合の五つは、それぞれがバラバラに孤立した無關係のことではなくて、互が密接に連絡のあることでなければならぬのです。第一の無私は他の四つの根底となるもので、佛教の實踐道德の原理であります。第二の慈愛もやはり道德の根底であります。無私が消極的な自己の否定であるのに對して、慈愛は積極的な他人への働きかけでありまして、自

己の否定があるからこそよいよ力強く救済の働きとして働き出すのであります。無私でなければほんとうの慈愛はありえないので、この二つは裏と表との關係であります。さてこの二つが裏表一體となつて、家庭生活に働きかける場合が純潔となり、社會生活に働きかける場合が勤勞となり、更に和合となるのであります。では、如何にしてありますでしょうか。(二月十九日、(NHK放送の要旨))

訃報

本誌を毎號手鹽にかけて編集しておられた藤田寛雅氏は、五月初旬、不時の事故から急逝せられました。茲に謹んで御知せ申し上げ、皆様と共に御冥福をお祈りする次第であります。

生死不常と云いながら、痛恨、筆に表はすべくもありません。本號は、今は亡き氏の絶筆を載せ、又最後の編集となり、悲しい思出となつてしまいました。月落不離天というごとく、氏は永遠に本誌を離れず見つめておられるのであります。尚同人一同、次號に於て、氏を悼むの號を特集し、哀悼の意を表したいと存じます。尚、御改名は、

恢連社宏譽上人寛雅和尚



酒はとけ

凡

凡

傳

中村 素堂

福島縣の飯坂温泉に一泊旅行をした時、一晚に一斗二合の酒を飲んだといふので、宿屋から何か記念の品をいたゞけまんと、ねだられた高山氏は、ながい間その話の種にされたといふことであつた。

北國の山國に生れて、なかなかの資産もあつたのに、段々飲みつづして、始めは家財道具であつたのが、しまひには藏も家も、土地も山林もときれいに呑みつくして賣り拂つてしまつた。

永い間つれ添つて、この大酒呑みを面倒みて來た妻君も、田畑山林と一時所分に追つばらつてしまつて、狹斜の巷の眉目美しい若い夫人を後妻として、それに藝妓屋といふものをやらせて、日々を楽しさうに暮してゐた。

追つ拂はれた糟糠の妻君は子供をつれて教員をしながら少しも怨むところなく、靜かに少し離れた土地に暮してゐた。花が咲いて春を迎へ、月が冴えて秋を送り、十二

年程の月日をかへて行つた。

高山氏の藝妓屋はつゝがなく經營されて居つたが、前妻の方はつい二三年前に、淋しい生涯を一人娘の介抱に終へて、すでに土の下の人となつてしまつた。それから一年程して、酒呑みには避けがたい運命が高山氏をおとづれた、腦溢血をやり損つて半身不隨の中風とかいふものになつた。

すると睦ましく順調な彼の生活にも、むつかしい空氣が生じて、家屋の名義が後妻の名に換はつたとか何とかいふことになりながら、彼は遂に二番目の妻君とも別々に住む様な運命になつて行つた。そしてそこにはもう親切に彼を看病してくれる様な人々は誰も附いてゐなかつた。むかし國から東京へ連れて來て就職を斡旋してやり今日では何とか一人前の役人になつてゐる彼の遠縁の男

が、折々見舞つては彼の面倒をみてゐるばかりであつた。

口を開けば人を眼下に見下した物いひをし、一杯呑めば當路の人々をコキ下すのが楽しみらしかつた彼のことゝて、近づいて不愉快な思ひもしたくないのか、近隣にも餘り親しい者すらなかつた。

しかし私はこの男と同僚であつた官吏時代のこともあるので、逢へば何かと近況をきいたりしてその性格の如何ともならないのを、氣の毒に思ひ思ひしてゐたが、私は酒中の味を解さない男なので、談ずるに足らずとしてか、何かけむつたいといふ風にされながら過ぎてゐた。

去年の夏のはじめ、新緑の柔かい葉蔭の路を、杖にすがつて片脚をひきづりながらそろそろと郊外の方から歸つて来る彼に逢つた。その後又天氣のよい或る日の夕方その近くで彼の後ろ姿を見た、その日は杖を持つた手に添へて肴にするのだらうと思はれる魚屋の包みをさげてゐた。

日曜の午後に理髪をしやうかと、近くの床屋へ入つた私は、その鏡に映つてゐる理髪中の彼を見出した、あんな不自由な脚でこんな遠くまで理髪に来るのかと少々驚きもしたが、彼も私も鏡の中で顔を見合せて一寸笑を含んで親しく挨拶をした。何か暑くなつた氣節の挨拶の

言葉を取りかはした後、

『病氣の方はどうですか……』

『これは劫病で治るもんぢやないし、また治さうとも思はないよ……』

『しかしよくお出歩きになりますね、時々郊外墓地の細い路でお目にかゝるじやありませんか、』

と云つた話のついでから、彼が理髪中のつれづれに、私にともなく床屋にともなく語つたところは、

『今はもう、何にも楽しみもなくなつたよ、たゞお天氣のよい日にはあゝしてぼつぼつ元の家内のお墓詣りをするのが、何よりも楽しいだ。あそこの石に腰をおろして半日ほど居ると、しみじみ道樂者の罪の深さも思ひ出せるし、さんさん苦勞させた家内に對する懐かしさがこみあげて来て、獨りで泣けて、少しづつ氣が樂になるね……あんたは若い時分から信仰なんか持つてゐて、いやな奴だなあと思つてゐたが、こうやつて齡をとつて獨り者にでもなつてみると、嘘でも眞似でも心の頼りになるものを持つてゐるのはいいことだと思ふな……』

た。

私はその寂しさうな言葉を隣りの椅子で聴きながら、随分金と時間とをかけて來たが、あゝこの人はそれでもほんとうの尊いものを完全につかんだな、と思つて心の

中で覺えず合掌した。振り返つて自分なんか眞似ばかりで到底こんな深いものを得らさうにもない様なので、思ひふけつてとつさには感嘆の言葉も出なかつた。

『今でも酒は呑んでますか……』

といふのが、よいつぎ穂を忘れた私の問ひだつた。

『呑んでるよ、酒を呑まずに生きてゐても仕方がないからね……』

この人はこれでよいのだと私は思つた。

市井のありふれた生命のいとなみの中に生き、自分の好みに徹して生き抜いて、こんな自然な素朴な悟りに到

達して行く人間の姿も亦深い佛の道を考へさせてくれる。

その床屋で聞いた時に、死んだ妻君が深い紫色をした鳥かぶといふ花が好きだつたが、脚が不自由なので花屋へ探しに行けないといふ話だつたので、ある日の散歩のついでにそれを見つけた私が、一基の墓に入れるほど買つて届けに寄つたら、見かけない人が出て来て、つい先日彼が亡くなつたと告げてくれた。

酒中に佛國を見出して彼も佛となることが出来たかと思ふ。

終戦によつて、我國はすべての自信を失つてしまつた。今まで我が誇りとしていたものの中には批判のメスを向けてみれば他愛もないものが多かつた。又、敗者は全て勝者のもつ文化にも同じく劣等者であるという錯覺にとらわれて、何でも、アチラのものという事大思想に蔽はれやすい。

しかし乍ら、他の文化はさておき、佛教の研究では世界最高の權威をもつことは自他認めるところである。但し、佛教が最高權威をもつこととは別問題である。成程、現代日本の佛教學者の中には、英獨佛に遊學するもの多く、又、歐米の研究を無視できないのであるが、彼等は主として、佛教の中でも原始佛教、即ちパーリー語佛教とか、大乘佛教としても梵語原典のあるものに制約されている。佛教は、インド、中國、日本

と傳わつて完成している。彼等は、そのインドの或部分しか主として見ていない。勿論、漢譯經典にも通じた學者もいるが、大體はそうである。中國では佛教研究は今取るに足りない。我國のみが原典のすでに散失したインド經典を漢譯によつて讀破し又、中國に於て體系づけられた佛教を知りうるばかりか、その長い歴史によつて佛教を身につけているだけに研究の大局を誤らない。此點、我國は大いに誇りをもつ。我々佛教徒は自信と、又、佛教に對して責任を感じる。

だが、以上は過去の研究。將來は將來であるが、それにしても、我々は選ばれたる能力者である。佛教の中に自由と自信を寺庭に、學窓に、布教に、再發見し、研究室に、社會に、將來の佛教が研究されていかなばならぬ。(R)

誰でも、コレカラ野球や角力の仕合でもすると云う時、不安に思う。或は小資本でも持つて商賣でも始めようとする時、不安に思う。

不安に思うのは、仕合の場合なら勝ちたいと思うからです。それも實力もない癖に、強い相手を、どうでも斯うでも負かしたい。こゝ一番は敗けるに敗けられない苦しい立場だから、是が非でも勝ち度い、それなのに、どうも勝てそうにもない、負けそうだから「不安」なんです。而し、そんな事は無理な事でしよう。自分にも勝て

そうにも思えぬ程の

事を、無理に勝とう

と思うから不安定な

きめ方の爲めに、自

分から動揺して来る

のです。だからそん

なきめ方や、豫想を

スルことがいけない

のです。

今度の仕合は勝つか敗けるかわからぬが、全力を擧げて戦かおう出来る事なら敗けたくない、勝ち度いが、全力を擧げて戦つて今度も負けたら致方がない。全敗だ。たゞ敗けても思ひ残すことの無い程、決闘しよう、死闘するのだ。全一生を賭け全生命を賭けて、最後の一戦をするのだ——とのみ決心したら勝敗に捉はれず、不安が無くなる。

不安

中野
尅子

不安と云うことは、まだ決まらぬ勝敗の豫想を今からしようとするから、不安が生ずるのです。商賣でも、儲けぬ先きから儲けるのだ、儲け度いとアセルから不安になるのです。儲かるか損するか、そんな事はわからぬ。やつて見ねばわからぬ。先きでわかる事であつて、今わからぬ。今わかる事は、一生懸命にやろうと云う事だけだから、一生懸命にやろうと云う事だけ決めて置いて、損得、勝敗、成功不成功は、後になつてわかればいゝと投げ出して置く、すれば半分は安心で、たゞ一生懸命にやると云う事だけに専心する事が出来る。

それを儲け度いゝ、勝ち度いゝ、損したくない、敗け度くない等と、今から取越苦勞をしてゐるから益々不安になり、出る力も出ず、働く頭腦も働かず、思わぬ不覺を取るようになります。

勝敗は時の運と云う言葉があるが、それは其場合まで行つて見ねばわからぬと云う事で、それだから、もう眞剣にやつてもつまらぬ、どんな損をしたり敗ける事が有るかも知れぬから、一生懸命にやる事はいらぬと云う意味とは違ふ。

一生懸命にやるだけの事はやつて其上での勝敗は、其時の成り行きにまかして少しも心配せぬと云うのが、本當の「諦め」方です。勝敗損得は、運命の神様が握つて御座つて、我々では如何とも仕難いから、諦めて居ると云うのでは愚諦めで、本當に「眞理」を明らかにめたものではありません。それは間違つた宗教で、佛教でもそう云うような風に佛の力を教えるように思う人があるが、それは大間違いです。正しい信仰は、そんな偶像神を持たぬことです。常に自己の全責任の中から新運命を創造して行くことです。



童話

なむあみだぶつ

根本そよ子

今からやく八百年のむかし、浄土宗を、はじめてお開きになつた法然上人は、生れつき賢い上に子供の時から、一心に勉強をなさつて、深い學問を修められました。

三代の天皇にむずかしいお經のお講義を申上げたり、ごそうだん相手にもなられた、大へん徳の高いお坊さんでした。

そのころは、源平兩氏が、お互に争つていた、騒がしい世の中でした。人々は心にもない戦争にまきこまれて、迷つていたので、みんなは、上人のありがたいお話を伺うことを、大そう喜んでおりました。

上人は、どんなにえらい人でも、どんなに貧しい人でも、悪いことをする人でも、同じようにやさしく、しんせつに、たれでも安心して暮せる心の持ち方を、教えて下さいましたから、その徳をしたう人々が、上人がお歩きになるあとから、ぞろぞろとついて行くほどでした。

では、わたくしたちも、上人のありがたい徳にひたりたいものです。えい、それはだれでも、あやかることができますよ。

ね、あなた方のおじいさんや、おばあさん、それからお父さん、お母さんが、ご先祖やなくなつた方々をおまつりしてある。お佛だんに向つて、「なむあみだぶ、なむあみだぶ」と、手を合せておがんでいらつしやることはよくご存じでしょうね。

そして、あなた方も、お父さんや、お母さんのそばに、ちよこんとすわつて、そつと、お父さんやお母さんのごようすを、まねながら、「なむあみだぶ、なむあみだぶ」と、おがんだことがあるでしょうね。

さあ、「なむあみだぶ」つて、何でしょうね。きつと、佛さまが、およろこびになることにちがいないことでしょうか。えい、ほんとうに、そうなのですよ。

そして、それは佛さまが、およろこびになるばかりでなく、生きていらつしやるおじいさんやおばあさんや、お父さんやお母さん、それにあなた方も、みんな、しあわせになるお言葉なのですよ。

そのありがたいお言葉を、お念佛といいますが、そのお念佛をお考えになつたのが、上人なのですよ。

二十五年という、長い間かゝつて、人間のしあわせのために、このお念佛をはつめいされました。べつに、むづかしいことはなく、だれでも、心をこめて「なむあみだぶ、なむあみだぶ」と言えば、それでしあわせになれるのです。

ずい分、やさしいことでしよう。でも、このかんたんなことをはつめいされるまでの、上人のお苦しみは大へんなものでした。大ぜいの人の苦しみをお救いになるために、たく山の本をお読みになつたり、辛いご修業をなさつたのです。決して、ご自分が、しあわせになろうとして、お勵みになつたのではないのです。

それに、だれもまねのできない、上人のえらさがあるのです。

では、「なむあみだぶ」と言えば、なぜ、しあわせが来るのでしょうか。それは、上人が心からおしたいしておられた、大へんりつばなあみださまという佛さまに、ど

うぞ、どうぞ、よい子どもになりますから、お守り下さいとお願ひしていることになるのです。

よい子どもになるには、お父さんや、お母さんや、先生のおつしやることを、よく聞いたり、きょうだいはい仲よく、お友だちにはしんせつに、たすけ合わなければなりませんね。そうすれば、だれにもかわいがられて、いつまでもここにこと、お家の中が明るくなつて、しあわせが来るのは、まちがいありません。

ね、わかつたでしよう。ほんとうに、ありがたいお念佛を、わたくしたちは、朝ばんとなえましようね。

「なむあみだぶ、なむあみだぶ」

さあ、きょうも一日、楽しく、ゆかいに暮せましたね。あしたも。あさつても。

むかしインドのやぶの中に、二本のくちばしのある鳥がいました。ある日、一つのくちばしがマンガーのおいしそうな實を見つけて一人でたべてしまつた。も一つのくちばしは大へんねたまやで怒りました。たべた方は、どちらがたべても同じおなかに入つて、どちらの血とも肉ともなるのだから、今日のことはゆるしてくれといいましたが、ききいれません。相手を苦しめるため、毒の實をたべてしまいました。ねたまやのくちばしも、一方のくちばしも、鳥ぜんたい苦しんで死にました。

(インド・パンチャタントラより)

今日の

随想

土筆

藤田 寛雅

焼けあとを掘り起した畑には、埃っぽい色をして、麥が生えていた。瓦礫のまじった畑の土は、赤茶けた焦げ色も生々しい。空だけは、春の色をしていたとはいえ、どちらを見ても目につくものは、荒涼とした焦土の姿だった。敗戦のあとの一、二年のことである。そうした荒廢の街に立つて、私は小學校の頃歴史で習った歌をよく想ひ出した。しみじみとした實感をもつてそれは胸に迫った。

なれや知る都は野邊の夕雲雀

あがるを見ても落つる涙は、

細川・山名の兵、およそ廿萬が、當時の首都京都、永い歴史に燻し銀のようにしつとりとした京の街々を、戦火に巻き込み、戦塵にまみれさせたあの應仁の亂のあとに、残したもののは、やはり戦後の東京と變らぬ荒涼としたものだつたに違ひない。そしてその荒野に住む人たちの姿にも、また自づと相似るものがあつたにちがいない。

近頃ふと、そのころ京に住んだ中御門宣胤というお公卿さんの日記を讀んでいて、古今を距てる五百年の年月をとびこえて、戦争がもたらした廢墟の中に生きる人の心を想つてひと頃の東京の姿をつくづく想ひ出させられた。

焼け跡に立つて、あのあたり、このあたりと、在りし日の家のたゞずまいを焦土、瓦礫の上に描き浮べることは、なつかしいなどというよりは心さびしく、はてはもの怖ろしくさえ感じるのだつた。しかし曾て住んだところを、そこでの生活が楽しかつたにせよ、苦しかつたにせよ、スッパリとは見捨てがたいのが人情である。疎開をして或る程度おちつ

いても、尙ほもとの處に歸りたい、という心は誰もがもつている。

宣胤も焼けた邸跡を捨て去り難かつた。「舊跡に執心するにより、形の如く一字を取り立て」たが、「四方荒野により無用心」——まことに東京がそうだつた。夜ともなればましてボツリ／＼と赤錆びたトタン圍ひのバラックが荒野の中に建つてゐる街は、物騒きわまるものだつた。五百年前も戦火に失なわれた街は同じである。その上、工事も想うようには進まない。そこで「今に移住せず」と彼は歎じている。

戦後ことに烈しかつた食糧難に人々はせめての補ひにと、焦土を掘り起して畑を作つた。或る日の宣胤は、河原に行つて土筆を摘んでいる。その途次、岡崎聖護院の邊に廻つてもみたが、「亂後、未だに再興せず、小屋少々在るのみ」、親しかつた亡き房什僧正の坊跡にも足を運んでみたが、こゝとても同じこと、たゞ「懷舊の涙、袖に落つる」の他はなかつた道に「侍法師一人に出逢つた」ばかり。春の日というに、人影もない焼け跡の道に、ふと人の姿を見かけたとき、彼は、何かたまらな

いものを感じた。「あゝ生きてゐる」といつたものが胸をかすめたでもあろう。

歸つての夕餉に、彼は晝間、河原で摘んだ土筆を膳に上せて、賞味したが、想えば全てがものわびしい、このまゝに減んでゆくのかと、もの怖ろしくさえなる焦土の生活の中であゝ、土筆は麴りゆく春の香をもつていた。

宜胤は何か、晝間焼け跡での、白々としてやり切れなくなつた心がほのかに慰められてゆくのを感じながら、ひとつひとつ、土筆をかみしめた。春がこゝに來てゐる、それは懐しくもやわかい感觸だつた。

いまの東京は、もうあの戦後一二年の焦土の街の想ひを忘れてゐる。戦前に變らぬ家並街並の賑はひである。春の摘草を誘ふポスターが、雑踏する驛々にはり出されてゐる。河原の土筆を摘んで夕餉の膳にのせた宜胤のような、戦後の想ひは人々の心から、もう殆どうすれている。

だが、ほんとうに、人々の心の中にまで、お互に春の麴りをあたゝかく感じさせる土筆の香が萌えだしてゐるだろうか。心の中にはまだ「四方荒野、無用心」の荒廢の瓦礫があ

るとしたら、復興の日も未だ遠いというの他はない。

トートム・ボール

竹中 信常

先月上旬、東京朝日に、アメリカから、インディアンが使つてゐるトートム・ボールが一本寄贈され、たしか日比谷公園のどこかに建てられることになつたとのことである。その翌日の矢張り朝日の天聲人語には、このトートム・ボールが、アメリカ・インディアンの間では祖靈の表象として尊崇されると同時に、トートム組織なる社會統制機構が極めて嚴肅に守られてゐることを論じ、現在日本の社會秩序の混亂を嘆いてゐた。

此點、日本人たるものも、インディアンにはかなわないわけである。事實、彼等の社會には、私達の想像以上に嚴格な規律があつて、而もそれが嚴重に守られてゐるのであつて、統制すれば闇が出で、お札を造ればニセが出

來るのとはチト様子がちがつてゐる。成程彼等の生活は、西部活劇に出て來るように、裸かで、馬にのつて、野山をかけ歩いて狩をして暮らすといつた、程度の低いものである。又、北海道アイヌの如く、衰退の過程にある過去の人種ともいえる。それ故、必らずしも彼等の眞似をする必要は毛頭ないが、少くとも彼等が生活と眞實にとり組んでゐるということはいわれる。生きることに一生懸命である。一方には自然が加える暴力がある雨、嵐、旱魃、饑饉、野獸等々。他方には文明の壓力がある。白人文化の及ぼす破壊的影響力。病氣、土地、權利、生活變化等々自然と文化の板ばさみになつて苦しんでゐる。それだから、生きることに懸命となる。一日一日が大切となつてゐる。一日生きることに非常な努力をしている。生きるということを誠實に、まじめに考えて生活してゐる。

私達はよく「生活をエンジョイする」という。少しでもこの暮しを楽しいものにして行かうといふのである。ところが、インディアンは生活を戦いと心得てゐる。自然に對し、外敵に對し、文明に對して一刻の休みなしに

戦つてゐる。戦ふことが彼等にとつては生活なのである。戦を止めれば負ける。負ければ死の手が待つてゐる。生きるには戦わねばならぬ。「ストラッゲル・フオー・ライフ」という言葉があるが、彼等に於いてその最上の表現を得るのである。

而も、彼等のこのような「生活の戦い」には宗教が裏づけになつてゐる。彼等の生活全般に信仰が漲つてゐるのである。とうもろこしをつくるのも、狩をするのも、旅をするのも、子供が産まれ、育ち、病み、老い、死ぬのも、すべて宗教的な行事が支柱となつてゐる。

私達の世界では、宗教は、たゞ僅かに「死」と結びついて、からくも維持されてゐるが、彼等にあつては、まづ第一に、生まれることそして生きることが宗教と結び合わされてゐるのである。大事非常の際はいうに及ばず、日常生活の隅々にまで宗教的觀念と宗教的行事とが行きわたつており、その生會生活が、宗教的命令によつて秩序づけられてゐる。

私は、佛教の戒律に超自然的な罰の觀念がない限り、それは道德にすぎないと考えてい

る。佛罰ということとは、或意味では迷信じみて聞えよが、然し、道德では律し切れぬものを大きく統制するには、何か人間以上の力を待たねばならぬようである。

トーマス・ボール丈けを見て、その統制力を羨む前に、私達の社會生活に、宗教的情操を盛り込んで聞かない、規格はづれの出ない、超人的罰の觀念を培養すべきであらう。

魅力

松濤 誠廉

魅の作用は、對象のもつ素質と、主觀の素質との兩者から生ずるものである。この一方が缺けても起らない。

東洋美人の代表、シナの西施にせよ、日本の小町にせよ、とにかくこうした美人を見てヒョロヒョロツとするのは、その人に素質があるからだ。その證據には、子供の前には美人はない。糞尿をかぶつた西施も駄目だ。一枚、皮をぬいだストリップも、人は驚くのが

せいぜいだらう。

私は美人を見るときに、よく思つた。佛教者である以上は、あのように法的に人を魅したいものだ、と。身につけてゐる衣裳が、魅力を増すことも分つてゐる。馬子にも衣裳髪かたちだが、しかし眞の美人というものは、何を身に着けても、そして特にどうというでもなく自然に立居振舞していてもそのまゝに完全に男たちを魅してゐるものだ。魅せんがために、着物をえらぶなどは、上の部ではない。美人だとしても下々に屬する。

いまの佛教者は人を、法に於てこのように魅し得るであらうか。對象として覺者の作成は可能であるとしても、主觀・素質としての本清淨心とか、本質などというものが無ければならぬが、これは果して起信論の言うやうに、先天的に人間にあるものであらうか。

倫理で言う良心なども果して後天的のものでなからうか。心理學者はどう裁きをつけてくれるか。それとも自分が緊縛一番、悟りを開いて實驗と出るか。

ことば

前田 龍海

此間、關西に旅行した東京人の話によると關西では、どうも、「有る」ということを「ない」というらしいという。私は關西で育つたのであるが、そういう言葉は聞いたことがないので、聞き返すと、京都驛の賣店で、何々ありますかと訊ねると、あるのになんといつたという。そこで、色々と考えてみて、成程と思つた。というのは、ありますかと聞いて賣子は、やはりありますと答へたのだ。所が文字にすると判らないが、關東では、答の「あります」は、すが、口の廻りの筋肉を引き氣味にして、口をやゝ開き齒音sを明瞭に出しまと、すとが同じアクセントである。所が關西では、すの發音が、口をつむんで、すといよりすウと、少し引張り氣味にして、口の中であうみたいであり、まにアクセントがなぐ、すウに一番アクセントがある。この結果

ありますウが、東京のありませんに聞こえたためであつたのだ。

全國の方言は、それ／＼の言葉とアクセントとイントネーションを持つていて、このよるな場合は、ほんの一例にすぎない。

しかし、他國語を、その發音通り自國語であらわす場合、つまり音譯される時は、もつと極端になるのが多い。同じ英語ながら、ストライキは組合關係、ストライクは野球關係に、又、トラックは貨物自動車、トロツコは手押車に使用され、其他、カップとコップ、グラスとガラス、といった風に、日本的英語になる。近頃は、アメリカ風の發音が流れこんだり、英語流の敘述方法が取りいれられたり、文法を無視した新假名づかひと制限漢字が强行されたりして、我國のことばも變様しつゝある。福澤諭吉の著書等により、明治は我國國語の一變革をした時代であつたが、明治に限らず、「ことば」は絶えず變り消長を遂げていく歴史的必然をもつ。翻譯という國境を越えればおのずと含む意味も、ずれてこよう。造られることばも多いが、むしろ、それも含めて、ことば全ては、人間社會の内容に

從つて、もたらされ、成立せしめられたものである。ジャーナリズムは、言葉を造るといふが、社會が、期待し要求する素地があつてはじめて言葉として成り立つ。その素地を早く感じて文字に移し、しかも影響を最も與てるのがジャーナリストなのである。新しい文字を作ることとは出来ないであつて、古い文字の新しい組合せや、新しい意味を帶びしめることによつて、新しい言葉が成立する。長い歴史の中では、一つの言葉に、いくつもの意味がつく、數千年の歴史ある印度の言葉の中には、十指以上の意味を持つものが、ざらにある。各々、時と所における社會人心の下の地に使はれて來たのである。

法然上人の改めて教へ殘された「なむあみだぶつ」という聖句も、一宗に限らず、今日も、又未來も、不易の光を輝かせるであらうが、それは、知性が發達しても變らない人心の素地を負うて立つ言葉だからである。東西、所へだてゝ人異らず、星霜、時移つて心は變らない。

x

x

x

法然上人の御廟

須藤隆仙

「京都——京都——」

冷い朝の空氣を破るが如く擴聲機から驛名を知らず驛員の聲が流れて来る。

郷里函館を出てから恰度丸二日、船と汽車とに運ばれながら、佛教の都、京都の街に足を降す事が出来た。石見地方への旅行の途中是非一度參詣したいと思つて居た總本山知恩院へ上る爲である。焼失した京都驛前に出ると各地方からの團參が、それぞれ旗を立て、並んで居る。師僧に連れられて先づ、東本願寺に參詣し、次で西本願寺、三十三間堂等を拜觀して、いよいよ知恩院へと足を運んだ。

大きな石段があつて、其の上に雲をさへへる様な山門がある。大勢の人々が其の山門を出たり入つたりして居る。山門をくぐると其處にひろびろとした境内がひろげられ、大殿

阿彌陀堂、庫裡、と、世界に誇る、木造大建築の伽藍が棟を並べる。參觀の人々が大殿の前に右往左往してゐる中を通り抜けて、先づ元祖大師の御廟にお参りする事にした。

御廟は大殿の右手の小高い處にあつて幾つかの石段をのぼるのである。石段の下に

「圓光大師本廟路」

と筆太な字で刻まれた石碑があつて、兩側に「大師御廟前」と記された石燈籠が奉納されてある。脱帽して外套を脱ぎ靜かに第一段目の石段をふみしめる。

「自分は今、法然上人にお會い出来るのだ。」と思ふと何かしら全身が固くなる様な緊張を覺える。

やがて石段を上り終ると左横に門がある。その門をくぐつて、右手に又幾つかの石段を

のぼり、再び左手に廟堂を拜するのである。

さき程から、何んとはなしに胸の中から、こみ上げてくるものを感じて居た私は、廟堂の前に合掌した時、思はず泣いてしまつた。

お十念を唱え様と思つても、聲が出ず、只もう、泣けて、泣けて、仕様がなかつた。

「もつたない。く」と何者か胸の中でつぶやいて居るのが尙更感じさせられて、只もう、泣く以外に何もなかつた。

歸りがけに段を下りる時、下の方から濡髪様にお参りする藝妓達が上つて来るのと出合つたが、泣いた顔を見られるのが、はづかしい様な氣がした。

御本尊様にお参りし、伽藍の内部を、拜觀して、再び山門を出たのであるが、何か心残りがして、御廟から遠さかるのが惜まれた。驚張りの廊下、忘れ傘、二枚瓦、其の他、色々の珍らしいものばかりを見させて頂き、又大殿、阿彌陀堂、等も參詣さして頂いたが、元祖大師の御廟に參詣した時程感激させられた事はなかつた。

「ビイ ビイ」と鳴く驚張りよりも、不思議な謎を包む忘れ傘よりも、雜草につままれ

た御廟の方が、どれ丈價值あるか知れない。雜草と云ふ言葉が出たが、御廟の圍りには雜草が生え、廟路の石段にも草が伸びて居る。

御廟に草の生えて居るのを、嘆く人もある。法爾自然であつて見れば、草の伸びるのも自然であり、又其れを嘆げく人も自然であらう。

再び京都驛から汽車に乗つて、汽笛一聲と共に、東山の山々を後にした時、私は、思はず御廟の方に向つて合掌した。

「せめて、一生涯御廟の草取りでもして過そうか。」等と思つても見たが、其れも思ふ丈で爲せる業ではなかつた。

法蓮房と云ふお弟子が、

「昔から、先徳は皆遺跡があります。しかるに上人は精舎一字も建立して居りませんが御入滅後は何處を遺跡と致しませうか。」

と尋ねた時、上人は、

「あとを一廟にとよめたならば遺法（上人の遺されたみ教え）が、あまねく行きわたらない。私の遺跡は諸州に遍滿して居る。どうしてかと云へば、念佛を進める事が私一

代の勸化なのであるから、念佛を修する處は、富貴貧賤の別なく、いかなる處でも、皆、私の遺跡なのである。」

と仰せられたと云ふ事は有名な話である。

いつ、いかなる場所に於ても念佛を唱ふれば、たゞちに其處が元祖大師の御遺跡となるのであるが、然し其れにしても、やはり私は華頂の山の御廟を忘るゝ事が出来ない。

其れは本當に上人の御靈が、ねむつておられる處だからであらう。

限られた一廟を無性に戀ふるのも、あさはかな凡夫なるが故であらうか——。

勅修御傳と云ふ書物の第三十八には、上人の廟堂に就いての、種々の奇蹟を記して居る。

その中の一つに、こんながある。

別當入道（これかた）方卿の娘（一説には孫ともある）

栗田口（あはたぐさ）の禪尼が、上人御入滅の後、二月十三

日の夜、上人のお墓に参つた夢を見たと言ふのである。其の夢は、上人のお墓が八幡（やまはた）の寶

殿であつて、戸を開けると其處に御正體がましまし、傍に居た人が其の御正體を指して、

「これこそ法然上人であるぞよ」と云はれた

ので、其れを聞いて信心が起り、身の毛がよだち、汗が流れたと云ふのである。

又或る女が同じ年の三月十四日、やはり上人の御廟に参つた夢を見たと言ふのである。

其の夢は、御廟の庭に色々の蓮華があり、一人の僧侶が未だ開かない蓮華を一莖、其の女に與えて、「この地に参詣した者には、此の蓮華を一莖づゝ與えるのである。これは往生人の數の中に入る、しるしである。この華を廣く世間の人々に教えひろめて呉れ」と云ひ、

合掌して其れを受け取つた時、夢がさめたと言ふのである。女は此の夢に驚いて、早速、上人のお墓に参つたところが、地形と云ひ、

廟堂と云ひ夢と寸分も違ふところがなかつたので、深い信仰心を得て、此の事を世間に披露したので、此の土地に参詣する人々が非常に多くなり、忌月（正月）には市が出る程、

盛んな参詣ふりが見られ、亡日（二十五日）

には上は高位高官の人、下は下僕に至る迄、袖をつらねて参詣したと云ふのである。

誠におもしろい話である。そして又、御廟に参詣するとこれ丈の功德を得られると云ふ

のだから有難い極みである。

未だ開かざる蓮華を一莖頂いて、往生人の數に入る事の出来る功德は、御廟にお参りする人々に與えられた思議す可からざる事實でもあるが、其れが單なる言傳えや、物語りの愚話でない事は、直接此の地に足を運んだ人こそ肯定し得る所でもある。

開かない蓮華とは未敷蓮と云つて、やがては開く事を意味する。御廟で頂いた未敷蓮は、やがて往生の時開花する縁結ひのしるしである。

此の惡人の私が、此の愚かな私が、此のくだらない私が、殊勝げに法人上人の御廟で泣いたのも、誰か知ら私の心に未敷蓮を一莖、恵んで下さつたからなのである。

思い返せば此の日は恰度、彼岸結願の三月廿四日であつた。

今日彼岸、菩提の種を蒔く日かな

俳人蕪村の句が今更の如くうれしい。

御廟で頂いた未敷蓮を菩提の種として、救はるゝ日迄、私は極樂淨土を夢見るのである。

願はくは上人の御廟に一生に一度は是非御参詣されん事を、私は未だ参詣出来なかつた人々にお勧めしたい。種々な事情で、はるばる

京都迄旅立つ事の出来ない人もありませうし又「念佛を修せんところは、貴賤を論ぜず、海人漁人がとやまでも、みなこれが予が遺跡なるべし。」

と仰せられた上人の御教えに背く事にもなるが、これが私のかくし切れない心からの叩びである。

もう御廟の側を離れたくない様な氣がした時やはり私も、念佛の聲する處、皆御廟と化する事を思い出して石段を降りたのである。

然し御廟を戀ふる心は、今も尙變りはない。

草も木も、かれたるのべに唯ひとり

松のみのこる彌陀の本願

圓光大師御靈場第二十五番、華頂山知恩院の御詠歌である。

現實を放ふものは唯これ彌陀の本願のみで

ある。唯口に南無阿彌陀佛と唱ふる丈で無量壽、無量光の絶對的力に抱擁される尊い御教えは今から七百四十年前、法然上人に依つて始めて廣く一般に廣められた。

むづかしい理論ばかりの佛教でも無く、行じ難い、戒律に終始する佛教でも無く、眞に

わかり易く、然も行じ易い佛教が末の世の唯一つの燈明として暗きを照し始めた時、其の光りを受けた人々のよろこびはどんなだつたであろう。

それは恰度、すべてが枯れ盡した荒れ野に松の緑のみが、人々の魂を憩ふ其れと似て、然も比べものにならぬ程、まだまだ深大なものだつたのだ。此れを思い、彼れを思ふ時、上人を讃仰せずにはおられようか。

御廟で泣いた私であつたが、今日一日を反省すれば罪だらけの生活である。否今日のみではない。昨日も、一昨日も、其の前も、其の前も、悔い無き生活は一日たりとてなかつた。

切角御廟で頂いた未敷蓮も、此れでは開かぬ間に罪惡の炎の爲に焼しおれて仕舞ふのではなからうか。

それではなんにもならない。常に念佛を唱えて、罪惡の炎に稱名消滅罪の水をかけねばならない。

「念の稱名は常の懺悔なり」と善導大師は仰せられた。私は今、御廟で頂いた未敷蓮を、しつかりと抱きしめて居る。

布施
行者

颯田本眞尼

藤吉慈海

颯田本眞尼は、弘化二年（西曆一八四五年）十一月廿八日、愛知縣幡豆郡吉田町颯田清左衛門の長女として誕生し、幼名を「リフ」といった。颯田家はもと元祿事件に名高い吉良家に關係のある舊家で、代々農を業としていた。兩親とも佛教の信仰に篤く、とくに母親は胎教を重んじて、懷妊後は夫婦ともに、精神料理をいたゞき、五ヶ月の間毎日、佛前で禮拜をつゞけられた。その禮拜のとき、母はお腹にある子供のために更に續けて百遍禮拜をなし、どんなに忙しくて一日としてこれを欠かされることはなかつた。本眞尼の兄弟は十二人いられたが、そのうち六人も出家し、生れた子供には、三歸戒を授けられた。

このような信仰ふかい雰圍氣の中に育つた本眞尼は、幼少の頃から普通の子供と違つていた。子守の背中におんぶされてお寺の前を通ると、この子供は教える人もないのにおじぎをしたりして人を驚かした。また他人にものを施すことが好きで、乞食が來るとお米をお碗一杯施すことにきめてあつても、一杯も三杯も施すといった風

の子供であつた。稍々長ずるに及んで、出家の志ふかく、兩親にそのことを話したが、長女であつたために仲々許されなかつた。然し月日がたつと共に出塵の志益々つよく、すべての所作が普通の人と異なるので、その母親もとうとう出家することを許された。それで安政三年九月一日、十二歳にして、愛知縣碧海郡旭村中山貞照院の天然和上について得度し、叔母にあたる同縣幡豆郡横須賀村東城眞珠庵の本乗尼のもとで修道生活に入られた。

ある日眞珠庵へ乞食が來た。本眞尼はお米を施そうとしたが、その乞食は容器をもつていなかつた。それをみた本眞尼は自分の着ていた襦袢の袖をひきさいて、それにお米を入れて渡したということである。

また寺小屋に通つていた頃、お習字が上手で、或る日それが張り出されて先生に大變ほめられた。子供心にうれしくてたまらず、眞珠庵に歸つてお師匠様の本乗尼にそのことを話すと、「それは結構なことだが、はり出してもらつたりすると魔がさして

いけない。魔がさすといいいお坊さんになれないから……」
と申された。そこで

「そんなら寺小屋へゆくことはやめる」

と言つて、さつさと机をかついで歸り、それから、ひたすらお念佛とお臺所の仕事に専念された。そのころ、本眞尼はお釜やお鍋についた御飯などをすぐ洗はないで、よくゆすいでその汁を頂くと立派な人になれると聞いて、いつもその通り實行された。

又ある時、お説教を聴聞して、そこでお授戒に全員を勧誘すると八萬四千の黄金の塔を建てる功德にもひとしいと聞き、全員を十人勧誘してお授戒を受けさせたいと心ひそかに發願して、お師匠さまに願つて三間日間托鉢に出して頂いた。母親のもとへもゆきそのわけを話されると、母もその志に感じて麥三升を御供養された。それから托鉢によつて頂いたお金で、お授戒に入るお金のない人のために、自分で五人分のお金を出してあへ、やつと十人の會員をつくられた。こうした隠れた徳行を積むことによつて、若き日の本眞尼はその求道心を益々熾烈にして行つたのである。

こゝで私共は、こうした行業純一な尼僧を生むに至つた當時の環境について考えてみなければならぬ。

由來、尾張・三河國一帯は徳川時代より佛教の教化が周ねくゆきわたり、特に念佛の法門は懸頓和上をはじめ、徳住上人や徳本上人などの高德の教化が相續したため、その遺風は今日も尙ほゆかしく傳承されている。こうしてふかく培かはれた福田から地涌の菩薩ともいふべき高德の僧尼の輩出するのも、けだし不思議ではないが、

本眞尼をして眞に高德の尼僧たらしめたのは、當時颯田家の子守をしながら本眞尼を育て、後に出家された慈本尼の感化の大であつたことをみのがしてはならぬ。

慈本尼は徳川時代を通じておそらく第一といわれる立派な尼僧で徳本上人と並び稱される高德の念佛者であつた。慈本尼がまだ颯田家にいられた頃、その母親が非業な死に方をされたので、その追善のために、慈本尼は、深夜床を起き出でて家の周圍をぐる／＼とめぐり乍ら合掌繞道しつゝ二時間位、人知れずお念佛を申された。ある夜、繞道している時に、母の佛をゆめみ、それから出家して加茂郡三舟に入山して修行された。三舟に於ける慈本尼の修行振りは全く眞劍そのものであつた。睡魔をさけんとしては、崖の端に端座して稱名念佛し、ある時は箱に釘をうちつけてその前に座り、百日間不臥の念佛に専心精進されたといふことである。その百日間の不臥念佛の中に、再び母親の佛を見、深く自得するところあつて、信州善光寺へお禮詣りに行かれたが、その時はいてゆかれた草履はちつともすり切れていなかつたと伝えられている。この奇特な無心の念佛者は、空中を蓮華をふんで善光寺へ往復されたのもあろうか。

ともあれ慈本尼はこの百日不臥の念佛中に三昧發得されたとしく澤山の人々が慈本尼を拜みに來て困つたといふことである。この慈本尼のお弟子が眞珠庵の本乗尼である。その本乗尼も本眞尼が十八歳のとき亡くなられたので、本眞尼はせめてお師匠さまへの手向けにと、四十八夜の別時念佛會をつとめられた。まだ十八歳の本眞尼はお師匠さまが極樂へ行かれたか、どうかを知りたいと思つて、晝

夜ふつとほしでお念佛を申された。満願の夜うつら／＼とされたとき、佛前の香爐のところから、すうつと蓮華の花が生えた。美しいなあと、思つてみると、お師匠さまがすきとほる様なキレイなお姿になつて現はれられて

「お前が、一生懸命に勤めてくれるので本當にありがたい。おかげさまでわしは中品上生に生れさし頂いたので安心しておくれ」

と申された。それはありがたいとお禮を申し

「私も極樂へ行けるでせうか」
とたづねられると、

「それはゆくさ、然しお前は非業な死に方をするぞ」

とおつしやつて、夢がさめた。この話は本眞老尼もお弟子方だけにしか語られなかつたそうである。

四十八夜の別時念佛も過ぎて、本乗尼亡きあとの眞珠庵には他所から御住職がみえた。十八歳の本眞尼は何處か靜かなところに獨り住んで、一心不亂にお念佛を申したいと思ひ母親にそのことを相談された。そこでかねて本眞尼のために準備してあつた、いくらかの財産で屋敷の一隅に小さな庵を建てゝもらつた。

その草庵で、本眞尼は三年間不臥の誓願を立てゝ、念佛三昧の生活に入られたのである。一口に三年不臥というが、凡俗の容易になしうることではない。その求道心の熱烈なるを思ふべきである。

大島徹水僧正のお話によると、本眞尼はこの三年間の不臥の念佛の間に、好相感見せられたらしく思われる。近世では淨土宗で好相感見した人といえは、山下現有大僧正と、本眞老尼くらいなもの

であらうと、大島徹水僧正は語られていた。

それはともかく、この十八歳から二十歳までの不臥の念佛生活こそは、老尼に不退轉の道力を興え、その生涯に決定的なものとなつたようである。これから後の老尼の生涯は、ひたすら正法興隆のため、念佛結縁のためのものであり、全く不惜身命、念佛をもつて一貫せられたのである。

眞實の佛教者のかくれた徳行は必ず人を呼ぶ。老尼の三年不臥の念佛生活にも、いつとはなしに人が集つて来て、妹の諦眞尼をはじめ、三十五・六人ものお弟子が出来てしまつた。夜もやすまず精進するこの本眞尼の健康を懸念した母親は、小さな椅子を供養されたこの母の誠心の椅子に夜の一時をよりかゝるのみで、ひたすら不斷念佛の生活をつゞけるこのうら若い尼僧に誰もがふかい感銘を受けたことはいふまでもない。傳へ聞いては、お弟子にしてくれといつて、澤山の人々が頼みに來た。すると、本眞尼は

「お弟子にすることは出来ないが、私と一緒に念佛を申すならありがたい御縁だ。御一緒に申しませう。しかし私は自分の食物だけしか用意がありませんから、それをお粥にしても頂きますせう」と申されると、

「いやその食物は私の方から佛さまに御供養させて頂きます」といふ具合で、澤山の人が集つてきた。父親が食物のことを心配して、その位のお米ではとてもやつてゆけぬだらうと申されても、本眞尼は一向氣にかけず、いや道心に衣食ありで必要なだけは、ちやんと如來さまが心配して下さるからと言つて、つゝましやかな生活

の中にお念佛に精進された。

かくて三十五・六人にもふえたお弟子たちでは、寝る處とてないので、このさゝやかな草庵にもいつか、本堂が建立された。しかしこの本堂の建立も、格別に寄附をつのるのでもなく、全く奉仕する人々の手によつて出来上つたのである。この本堂が、今日の吉田町徳雲寺の草創であつて、當時は慈教庵と稱していた。

この間、老尼は文久二年正月、中山貞照院の天然和上について戒律を學び、三年不臥の念佛を修えた後、慶應元年より二年にかけて寺津村瑞松庵の實英尼について宗學及び律の修行を積まれた。そして明治十四年十二月、三十七歳にして、京都黒谷金戒光明寺法主獅子吼觀定上人について、淨土宗の宗戒兩脉を相承されたのである。

この加行のときは、三河から京都まで遙かな道を、妹の諦眞尼と二人で托針をしながら歩いてゆかれた。名古屋から京都までの間が一番難儀されたようであるが、これも修行だと、行乞をつゞけて道をそがれた。江州草津に近いある茶店でお茶をよばれたとき、この二人の若い尼僧の何氣なく語る談話をきいて感心した茶店の紙婆はもつとありがたいお話が聞きたいから、どうか今夜はこゝに泊つて下さい、と頼み、それならお邪魔いたしませうと、その夜はこの茶店で村の人たちとありがたい法談に一夜をあかされたのであつた。こうした求道の念にもえる若い姉妹の尼僧が、日課二萬遍の念佛を續けられたという獅子吼觀定上人の勸誡にどんなにか感激し、如法な修行を積まれたことであらうか、想像に難くないのである。

顧みるに當時の日本の佛教界は混沌たるものがあつた。肉食妻帯

勝手たるべしの希告が出てからは、一般僧侶の氣風は全く地に落ち加ふるに廢佛毀釋のあとをうけて、佛法滅盡するかと思われた。然しこうした風潮の中に、敢然僧風の刷新を叫び「我執を除くには托鉢行が一番よい」といつて、維新の時に禁止された托鉢の解禁を政府に献言した一世の高僧福田行誠上人の徳風、また東京目白に目白教團を創設して戒律堅固な修道生活を送つた雲照律師の教化や、そしておそらく當時は岡崎昌光律寺にあつた志運上人等によつて、三河一帯の地に尊く傳承された淨土律の嚴肅なる僧風が、どんなにかこの若い尼僧の修道生活を、淨く嚴しく策勵したことであらう。

かくて本眞尼の精進は益々不退轉に、明治十八年四十一のとき、貞照院の戒幢和上について形同沙彌戒を受け、その行業はいよく純化されて行つた。かくして、托鉢、念佛の修道生活の間に、世人化益への自信と素地が出来たようである。

しかしこうした行業純一な佛教者にも色々な試練が訪れる。明治三十八年八月十七日夜、大海嘯があつて二河の海岸地方はすつかり泥海となり、農作物はおろか人畜の被害は多く、徳雲寺も深く浸水した。一夜の中に、たちまち幽明その世界を異にしてしまつた百何十人の遺骸の前で讀經念佛しつゝあつた本眞尼は、この人生の悲惨事にいたく心動き、災難に悩み苦しむ人々への同悲同感の大慈悲心は凝つて、この修道尼をして残れる生涯を難民救済に捧げんとふかく決意せしめたようである。

これからの老尼の人生は實に布施行體現の連續であつた。

浄土の會員を

一人でも多く

◇どなたでも會員になれます。

◇會費は半年一三八圓、年額二七六圓です。

◇會員には毎月「浄土」を配布します。

◇この會はみなさまの會ですか
らその發展のために、お一人でも多くの會員をつくつて、正しい信仰運動をひろめませう。お知合の方々にぜひおすすめ下さい。

◇お申込には振替（東京八二二八七番）を御利用下さい。

芝園だより

◇突如發表されたマツカーサー元帥解任のニュースは世界を驚かせたが、我々日本人にとつては更に大きな驚きであつた。思えば一九四五年厚木飛行場に元帥がその一歩を印してから、日本人の生活の中に、元帥の姿はつねに映像されて、瞬時も離れないものとなつてきていた。そして我々に光を與える對日講和を、我々は當然の如く元帥と結びつけて考えていた。

◇元帥の解任につよく驚き、ふかい惜別を感じる想ひの中に、更に浮び来るものは、今後の日本の運命である。アメリカ當局は對日政策の不変を強調している。リッヂウェイ中將は、朝鮮に於ける戰闘の終結こそ第一の任務であると表明されている。戰闘のすみやかな終結によつて眞に極東の、世界の平和が招來されることを我々は心から望んでいる。その平和は極東民衆の誰をも犠牲とするものであ

つてはならない。眞の平和は「各々安立」の世界をもたらすものであり、平和に第一主義も第二主義もないことを感じる。

◇明十六日、羽田からバターン號が飛び立つてゆく。私はいまこの後記を書きながら「一筆勾斷」の語を想ひ出した。詩人蘇東坡に或る禪師が與えた消息の中に、「一筆勾斷」して新しく出直すがいい、といふ意味のことが記されていた。

一筆勾斷とは帳面に棒を引くことである。棒引して消してしまふことである。人生にも、世界にも、こうした一筆勾斷の時がある。しかし問題は、その横棒の引き方である。些々たる我々の人生にせよ、世界の動向にせよ、この一筆の動きが、將來の靜動高下を決定してゆく。

◇元帥解任の問題は或る意味に於て、よりよき將來を生む上にとられた一筆であることを願つて止まない。平和を希求して行なわれたミューンヘン會議が、實は第二次大

戰を誘發してゆく轉機の一であつたことは、歴史が證明している。誤りなき一筆勾斷に生きる者にとつては、いつ自己の生涯が勾斷されても、何等の悔も憾みもないであらう。（藤田）

入會願御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下されば、着次第御送本申し上げます。

「浄土」 五月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿六年三月廿五日印刷
昭和廿六年五月一日發行

（定價貳拾圓）

編輯兼
發行人 眞野正順

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人續仰會

振替 東京八二二八七番
會費番號 一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓（送料共

新刊浄土トラクト

現代社會の混迷の中に、信仰を求める人々のために筆者がそれぞれ想を新たに、その道の一步をはつきり示した好著・本文各一六頁別表紙

信仰の導き

佐藤賢順著

一枚起請文

藤井實應著

本宗信仰の精粹、一枚起請文の永遠の生命は、いま身近かに語られた、必讀の書

◆各冊とも定價一部七圓送料六圓（切手代用可）

◆十部以上送料十二圓、十部を増す毎に六圓増、五十部以上三十五圓、百部以上は送料當方負擔

東京都港区芝公園五ノ一〇

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

浄土トラクト既刊

心の糧となる内容、親しみ易い文章、雅味のある装釘、そして誰もが氣輕に手にできる廉價——浄土トラクトは各方面に好評をもつて迎えられるています。

お十夜の話 藤田寛雅著 賣 切

お彼岸の話 竹中信常著 賣 切

お盆とおせがき 佐藤密雄著 四圓送料六圓

文書傳道は現代的要求です。讀むことによつて信仰の歩みを進めてゆく上に、また生活文化としての佛教への常識、教養をたかめる上にも、最適の良書、施本等に御活用下さい。必ず良き心のみのりが得られます。

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番